

詩を書くことは、大変なこと。でも、書き続けています

「詩を書くことって、けっこう大変なんです。かわらない方が楽なんですけど…。でも、書き続けているんですよ」と笑う峠谷さん。

峠谷さんが詩を書き始めたのは、21歳から。学生時代に図書館でふと吉岡実さん（大正8年〜平成2年・詩人・詩集『僧侶』『サフラン摘み』などの作品がある）の詩集を手にしたことがきっかけです。

「読書は子どものころから好きでしたが、詩は中原中也さんや宮沢賢治さんの作品を読んだ程度。

吉岡実さんの作品に触れたとき、新鮮な表現法に衝撃を受けました。自分と同じように物事を見、感じ、考えている人が詩を書いていて、自分でも書けるのではないかと思いました」。

以来、年に数編の作品を書いて詩の雑誌に投稿を続けている峠谷さん。一昨年から昨年にかけて投稿した『水棲でいるうちに』『新しい町』などの作品が高く評価され、見事『第39回現代詩手帖賞』を受賞しました。

感性がしなやかなうちに読書の素晴らしさを知ってほしい

峠谷さんは、昨年に登別に転



▲学習塾で授業を行う峠谷さん。

入し、現在、市内学習塾の講師を努めています。

「塾の仕事には、とてもやりがいを感じています」と話す峠谷さんが感じていることは、子どもたちの読書量の少なさです。

「よく読書離れという言葉を耳にしますが、そのせいか子どもたちの語彙が少し足りないように感じます。自分たちのころとは違って、今の子どもたちは、学校、部活動、塾と忙しく、落ち着いて読書する時間は限られるのかも知れません。でも、感性や想像力などを養うことはとても大切。感性がしなやかなうちに本に触れ、ぜひ言葉や文章で表現する楽しさを知ってほしいですね」。

峠谷さんは、講師の仕事に追われるかたわら、今年春に詩集を出版する準備を進めています。



KIRARI

とうげ や みつ ひろ
峠谷光博さん(新生町)

若手詩人の登竜門として知られる『現代詩手帖賞』（『現代詩手帖（思潮社刊）』が主催）。昨年、同誌へ作品を投稿する年間数千人の書き手の中から、峠谷光博さんが見事『第39回現代詩手帖賞』を受賞しました。

峠谷さんに、詩や読書離れが進む子どもたちへの思いなどを聞きました。

ふと手にした1冊の詩集から、詩作が始まりました。



昭和49年、虻田町生まれ。27歳。虻田町の小・中学校を経て函館ラ・サール高校卒業。筑波大学中退。昨年11月に登別に転入。学習塾の講師として中学生に理科と社会を教えている。室蘭の詩誌『パンと薔薇』同人。